

病弱・身体虚弱

(6) 情報機器等の活用

① 病弱・身体虚弱のある子供の教育を支援する情報機器等の活用

病弱・身体虚弱のある子供（主に入院している児童生徒）の教育的ニーズと照らし合わせながら、情報活用能力を育成する上での必要な観点を整理します。

情報活用能力とは、臨時教育審議会第二次答申（昭和 61 年 4 月）において、「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」とし、情報活用能力を読み、書き、計算に並ぶ基礎・基本と位置付けられました。そして、平成 20 年 1 月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」を踏まえた学習指導要領の改訂においては、生きる力を支える確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和のとれた育成を重視しています。この答申において「情報教育」については、「情報活用能力をはぐくむことは、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着とともに、発表、記録、要約、報告といった知識・技能を活用して行う言語活動の基盤となるもの」としてその重要性が指摘されました。

病弱・身体虚弱のある子供にとって、情報機器等の活用は、学習の空白などを補うこと、身体活動の制限などの病弱教育における課題を解決するために有効です。このことについて、文部科学省の「教育の情報化に関する手引」の中で、病弱・身体虚弱のある児童生徒に対する情報教育の意義と支援の在り方として、CAI（Computer-assisted instruction）教材の活用やインターネットの活用、コンピュータ教材によるシミュレーション学習やネットワークによるコミュニケーションの維持・拡大、テレビ会議システムなどによる前籍校との連携、交流の機会の提供などを行えるようにすることとしています。

② 情報機器等を活用した指導の実際

ア 学習の空白などを補うこと

児童生徒の中には、入院、治療等による欠席のために学習の空白や学習に遅れが見られることがあります。教師は一人一人の学習の到達度などの実態把握を行い、学習の空白や遅れを補うことが必要です。そして、指導内容・方法を創意工夫し、学習意欲を高めていくことが重要になります。

また、治療等のために授業時数に制約があり、各教科の基礎・基本を重視し、指導内容の精選、指導の順序やまとめ方に工夫を加えるなど指導内容の取扱いについて考慮していくことが必要になります。各教科等に関する CD-ROM 教材やインターネットからの情報、

学校教育において普及が進んでいるタブレット型情報端末の教育用アプリケーションなどを活用することによって、効率的に学習の空白などの課題を解決していくことが大切です。

イ 身体活動の制限を考慮すること

筋ジストロフィーなどの児童生徒の場合、補助的手段の活用を図り、姿勢保持や運動・動作の活動の制限の改善を図ることが必要です。そのために本人に合った教材・教具が重要になります。児童生徒が意欲的に取り組み、効果的な学習ができるようにするためには、特に身体面の負担を少なくすることが教材・教具の開発には重要になります。また、コンピュータなどの入力のためのスイッチの開発など、情報機器の活用を行うための環境整備が必要になります。

ウ 経験を広めるようにすること

入院している児童生徒の多くは、入院によって生活空間が限られ、直接経験が不足したり、経験の偏りを生じたりしがちです。各教科では、できるだけ様々な体験ができるよう教育内容を準備することが重要になります。例えば、理科や社会など経験を重視する教科においては、観察、実験、社会見学等を行うことが学習の基盤になります。

しかし、どうしても直接経験できない場合、視聴覚教材やコンピュータ、インターネットなどを積極的に活用して経験の不足を補う必要があります。例えば、テレビ会議システムを活用することで、入院中の児童生徒が間接的に校外学習に参加したり、病院内の教室では行うことが難しい理科の実験の様子を見ながら学習したりすることができます。

エ 少人数の弊害の改善

特別支援学校（病弱）や病弱・身体虚弱特別支援学級では、児童生徒数が少人数であることが多く、集団の中で様々な意見を聞いて思考を深めたり、社会性を伸ばさせたりすることが難しい場合があります。そのため、テレビ会議システムなどを利用して、合同授業を行うなどの工夫も大切です。特別支援学校（病弱）は、都道府県内に1校だけの地域もあるため、自治体の枠を越えて特別支援学校（病弱）間で定期的に交流している事例もあります。

オ 免疫力が低下するなど感染に関する配慮を要すること

免疫不全の治療を受けている場合や、がんや白血病などの悪性新生物に対する治療を受けている場合には、感染症予防のためクリーンルームに隔離されるなどの著しい行動の制限が行われます。そのような幼児児童生徒に対しても、テレビ会議システムなどを利用した授業を行うことによって、合同授業や交流及び共同学習を行うことが可能となります。

カ 自己管理能力を育成するための情報活用能力の育成

病弱・身体虚弱教育においては、病弱・身体虚弱の状態の改善・克服は、自己管理能力を育成し、自立や社会参加していくために欠くことのできない課題です。そのため、自らが主体的に病弱・身体虚弱の状態を改善・克服するために、①健康の維持・改善に必要な知識・技能の習得、②健康を管理する態度・習慣の育成、③障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する意欲の向上が重要な目標となります。そして、医療関係者と連携

し、自立活動の時間を中心に自己管理能力の育成を目指した教育を行うことが不可欠となります。その際に、カロリー計算、体重管理など数値化できるものは積極的にデータとして記録しグラフ化するなど、客観的に見るができるようにしていくことが重要です。

病弱・身体虚弱のある子供は、身体活動などの制限や制約が多いため、情報機器等を活用しながら情報活用能力を育成していくことが大切です。それは、情報機器等の活用により、病弱・身体虚弱のある子供にとって成就感や達成感を体験する環境が作りやすいからです。それにより、自信をもったり、自尊心を高めたりする機会とすることができます。これらのことは、子供が病気に立ち向かっていく気持ちを支援することでもあります。筋ジストロフィー等の生徒は、特別支援学校（病弱）高等部を卒業した後も情報機器等を活用した生活をしており、学校教育で習得したこれらの力は「生きる力」となって彼らの日常生活を支えています。